
もう二度と...

萌歌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もう二度と…

【Nコード】

N7417Y

【作者名】

萌歌

【あらすじ】

万+真+攘ノシリアスノ白夜叉バレ

(前書き)

2本目!!!こんな感じで亀より遅く更新していいことと思いますww

外は雨。もう何日もこんな日が続いている。太陽がないと自然と気分も晴れない。

当然万事屋もいつもの騒がしさから比べれば、だいぶ静かだった。

しかし、今日の静けさの原因は雨だけではない…と新八、神楽は思っている。

おかしいのだ、あの人の様子が。

いつもはジャンプだ甘味だと言って、ソファーにウダウダ寝っころがっている銀色だが、今日は社長イスに座り、ぼおっと空を眺めていた。心なしか、銀色の周りの空気もピリピリしている。

「銀さん、調子悪いんですか？」

念のため新八が問い掛ける。十中八九違つたろうが。

「ん？ああーそんなことねーよ。

たまには銀さんだってぼおつとしたいんですー。」

「銀ちゃんがぼおつとしてるとか何アルか？明日は槍が降るアルか？」

「ちよつと神楽ちゃん？何物騒なこと言つてんの？女の子がそんなこと言つちゃいけません。ってか俺がぼおつとしてるだけでそれとか酷くない？」

「だつて事実ネ。」

（銀時 Side）

……バレてたか。

出来るだけイライラを出さないようにしていたつもりだったが、地味に長い付き合いのこいつらには効かなかつたらしい。

どうにも嫌な予感がする。昔から嫌な予感だけは当たってしまっ。それに、最近自分の周りをつろついている奴らもいる。

「…………もうダメか。」

銀時はそう呟くと和室に入ってしまった。

〔銀時Side end〕

銀時が和室に入って数分。玄関のチャイムがなった。依頼人かと思っただが、今日は銀時が用事があるらしいので、内容によっては断ろうと考えつつ、新八は玄関に向かった。

「はい、今出ます。」

ガラッ

何度も壊され、だいぶ建て付けの悪い扉を開けた先にいたのは、真選組のいつもの3人組、近藤、沖田、土方だった。

「やあ、新八君。」

最初に言葉を発したのは近藤。間髪入れず沖田が「旦那居やすかい？」と続けた。

6

「銀さん、ですか？」

「ああ。」

「依頼ですか？…まあとりあえず上がってください。」

「邪魔するぜ。」

3人を応接間に連れていくと、音が聞こえたのか、銀時が和室から顔を出していた。

「税金ドロボーさん達が揃いも揃って何の用？言っとくけど、今日は銀さん忙しいんですー。」

「万事屋、お前に聞きたいことがある。」

「…何？」

そういつて怪訝な顔をして出てきた銀時はいつもの和洋折衷の服ではなく、白地に薄紅の桜があしらわれた、一目見ただけで上物と分かる着物に、濃紺の羽織という格好をしていた。銀時の銀髪によく映えている。

それを見た土方は苦虫を噛み潰したような顔を一瞬して、万事屋、と口を開いた。

「……お前が、白夜又だな？」

沈黙。

恐ろしい程に空気がピンと張り詰めた空間が広がった。銀時は俯いており、表情を伺うことは出来ない。

「……………やっと気づいた？」

数秒後、顔を上げてあっけからんとそう言い放った銀時。その顔は妙にサッパリとしていた。

「旦那……………」

沖田の端正な顔が辛そうに歪む。

「で？どうすんの？俺を捕まえる？」

「ああ。坂田銀時、天人大量虐殺罪でお前を逮捕する！」

「……………フフフッ」

軽く笑った銀時の目は、全く笑っていない。背後には殺気も漂っている。

「何笑ってやがる！」

うつすらと冷や汗をかきながら、土方も負けじと睨み返す。

「いや、あのツラさえ捕まえないお前らが天下の白夜叉様を捕まえられるのかなー？って。」

刹那、銀色の風が吹き、真選組の3人は床に伏せられていた。

「無理じゃん（笑）」

銀時自身は既に入口のところまで移動している。その手にはいつの間にか深紅の鞘に収められた真剣が握られていた。

「……ッ白夜又ああ！」

「……ッ銀ちゃんは白夜又なんかじゃないアル！銀ちゃんは銀ちゃんネ！」

「そつだ！銀さんをその名前で呼ぶな！」

やっとのことで声を絞り出した2人。土方が吐いた言葉にようやく我に返った。

「……出てこいよ、いるんだろ？」

2人の言葉に少し頬を緩めると、どこかに向かい声を上げた銀時。そうすると、音も無くドアが開きあまりにも有名すぎる3人が顔を出した。

「……ツッ桂……高杉……!!」

「……ッ!!お前は快援隊の……!!」

喉から手が出るほど捕まえない相手が目の前にいる。なのに銀時の峰打ちのせいで動けない。そのことは土方や沖田、近藤をひどく苛立たせた。

「いつから気づいておったのだ、銀時。」

「ツラが分かりやすすぎるんだよ。」

「ツラじゃない桂だ。それに高杉、何故お前が答える、俺は銀時に聞いておるのだ。」

「うるせエ、ツラ。」

「ツラじゃない桂だ。」

「まあまあ落ち着くぜよ。わしらは銀時に会いに来たんじゃ。」

「……悪かった。」

ハツハツハと黒い笑顔で辰馬が笑うと桂がバツが悪そうに謝る。
…しかし、高杉は華麗にスルーし、銀時に向き直った。
…

「銀時イ、大切な兄弟より幕府の狗の方が優先ってかア？」

「ゴメンね、晋助。捕まってた。早く行きたかったのに。」

「ツツお前用事って……!!」

「そうだよー。この3人と会う約束してたの。」

「信じてたのに……ツツ」

「やっぱり鬼はいつまで経っても鬼ってことかよツツ！」

「見損ないやした。」

浴びせられる罵声。

侮蔑の眼差し。

その光景は銀時の中である出来事をフラッシュバックさせてゆく。

「……………」

「……………銀時？」

桂が呼びかけても、何の返事もない。そのかわりに聞こえてきたのは最悪の単語。

「……鬼」

「……………そうだよ、おれは鬼。鬼はしあわせになんかなったやいないなんだ。」

「…………ぎん…ちゃん？」

「ツツ銀時！！」

「何言つてんだテメエ！！」

「金時！！」

桂、高杉、辰馬が駆け寄る。のろのろと顔を上げた銀時の目は何も映していない。

「銀時！！お前は鬼などではない！」

「テメエは俺達の大切な弟だ！！」

「わしらを見てくれとおせ銀時！！」

焦点の定まらない虚ろな目がゆっくりと3人を映す。

「……しんにい、こたにい、たつにい？」

「銀時……」

「帰ろう、銀時。」

「松陽先生の元に戻ろうぜい。」

「もうごきやんとくろにいる必要はなか。」

「……うん、帰る。せんせいのところにかえるよ。」

「……おまんら、」

坂本が口を開く。真選組の3人は銀時の変わりように驚きを隠せな
いでいた。

「銀時に鬼という単語は禁句じゃ。なのにおまんらは…ッ!」

その言葉に付け足すように、高杉が憎々しげに切り出した。

「どうして俺やヅラがテメエらに手を出さなかったか教えてやろうか。」

「……銀時が、真選組の奴らは良い友人だ、と言っていたからだ。貴様らが銀時に気に入られていたから、俺達はお前らに手を出さなかった。」

「……………ッ!」

「なのに、テメエらはいとも簡単にそれを裏切ったんだぜイ？」

銀時がそんなことを思っていたとを知った3人。今さらながらしかしてしまったことの重大さを痛感した。

「だが、もう容赦はせん。」

「真選組や幕府はもうすぐ俺達直々に潰してやらア」

大物攘夷志士2人は吐き捨てるようにそう言って、先に行った坂本と銀時を追うように出て行った。

しばらく声も出せなかった5人。

正常に働かない脳で分かることは、

あの銀色の笑顔はもう二度と見ることが出来ないということだけ……

(後書き)

だ、ダメだ……精進しまっす

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7417y/>

もう二度と...

2011年11月22日04時03分発行